



# 釧路新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

□ 3 □

平櫛田中の木彫に心奪われる

渡辺さんの自宅前にある工房玄関上に「彫心窟」と墨書された扁額が、また工房内には「彫心」の書額が掲げられている。渡辺さんはこの二文字を胸に刻み込んで、ひたすら木を削ってきた。少女や女性の立像などが、やさしい笑みを浮かべながら彫り出されてくる。自

らの心を鋭利なのみで彫り上げるような作業が続く。

削られた木屑やナタ、のみ、そして原木があふれ、いくつになっても大

いにかけているのかも…だから子供をテーマにした作品が多い。自分の心の中にあるそうしたものを、いくつになっても大

り心を奪われてしまった。札幌、東京、福岡でも個展開く渡辺さんにとって生涯

動を導いたのではないか。昭和五十七年に釧路で初の個展を開き、さらに精進を重ねてきた。ここ四、五年は毎年の個展続き。札幌、東京のほか福岡市でも開いたことがある。「これまでいろいろな方との出会いがあった。私が今日あるのもそれ

## 「彫心」胸にノミふるう

### 制作支える人との出会い

「幼い頃のイメージを追

れる工房で渡辺さんは

事に描いていきたい」と語る。釧路生まれで二十

今日まで約二十五年。木彫一筋の歩みはやはり貧窮生活も同伴したものだ

を決した啓示と言えた。そで、私の制作活動を支えている」としみじみ語る。

の一方がたの存在あってこそ、私の制作活動を支えている」としみじみ語る。

## 木彫

渡辺一夫さん(四八)

(釧路市春採二の三三)

んだ。「この頃、大阪で開催された日本の匠展で平櫛田中の木彫に出会い、その素晴らしさにすっか

たよつなもの。美術団体にも所属しなかったが、それが逆に自由な創作活

作品を通じての出会いや一人出かける旅先での縁に心打たれた時もある。そうした体験を昨年一月から「ぶらり日本ふ

れあい紀行」の題で本紙日曜版に連載したこともある。「なんだ、お酒を飲む話ばかりじゃないかーなどとひやかされましたよ」と苦笑する。お酒にほれ、クラシック音楽を愛する良き家庭人でもある。

木彫の素材は乾燥した原木。カツラやシナの木など四、五年分は確保している。「この原木をじっくりと見つめていると、イメージが湧いてくる。作品の構想が決まれば、半分出来上がったようなもの。後はもう、はぎ取っていく作業です」と説明する。彫刻家の平櫛田中に感動し、佐藤忠良をたえる。「佐藤さんは彫刻も良いがデッサンがすごい」と目を輝かせる。